タカラサカメ　財逆女　仁明天皇承和元年二月十三日加賀石川郡の人財逆女、一たびにして三男を生んだ。因つて正税三百束及び乳母一人の公粮を給し、以て之を育養せしめたとある。→タカラノミヤツコ　財造。

タカラヅカ　寶塚　鳳至郡蕨野及び釜屋谷の境界なる一二〇米の高塚山に在る。一名高塚又は錢瓶といひ、能登の神様といふこともある。

タカラノオミ　財臣　古事記に、蘇我石河麻呂の末弟若子宿禰を江沼財臣の祖と記してある。是に就いて出口延佳は、その財字を間字の譌であるとの説を爲してゐる。これは江沼をエヌマと訓むから起つたことであるが、沼をヌマといふことは古言に例がなく、江沼もエヌマに非ずしてエヌたるべきことは、一に江渟と書かれるによつても知られる。況や財字と間字と毫も類似して居らぬではないか。古事記の江沼財臣は江沼臣・財臣とあつた一字を脱し、若しくは略したもので、若子宿禰がこの二氏の祖であることをいふものであらう。

タカラノサツシ　寶の册子　一册。森田盛昌著。元祿十年二月出口彦兵衛長信の家にて、寺西喜平次重明が、幼童の翫べる寶船の繪を見て、誠の寶はいかなるものぞと尋ねたから、それに應じて著者が種々論辨した趣を書いてある。

タカラノミヤツコ　財造　財は多加良と訓むべく、和名抄に江沼郡竹原多加波良とある地、恐らくはこの族人の本居であらう。この地はもと多加良というたのを、和銅六年の詔命などによつて、竹原と改めたかとも言はれる。竹原郷が今何れの地に當るかは詳かでない。又天平三年の越前正税帳に、江沼郡主帳財造住田がある。蘇我若子宿禰の裔である財臣と姓を異にするから、出自は別かも知れぬが本居は同じいのだらう。承和元年紀に、財逆女が三子を産んだ記事がある。森田平次の加越能氏族傳に之を論じて、財氏は造姓なるが故に、この逆字は造字の誤で、財造某女とあつた名を脱したのであらう。しかし拾芥抄姓尸部に、財氏を無尸姓に列してゐるから、財逆女で正しいのかも知れぬというてゐる。又承和四年紀には、孝子財部造繼麻呂がある。前の住田は財造で、これは財部造である。是を以て加越能氏族傳に又説を爲して、姓氏錄を考へるに、日下連と日下部連とは共に河内國の皇別で、同姓であるが、出自を異にしてゐるから、財造と財部造とも自ら異氏であらう。併し續後紀仁明天皇承和十四年八月の條に、『春日部雄繼等二人。刊=部字=爲=春日臣=。』とある例によれば、財造ももとは財部氏であつたのを、姓を賜うた際部字を削つたのかも知れぬというてゐる。正倉院の江沼郡山背郷計帳に、矢田財部刀自賣・矢田財部夜和女がある が、矢田財部も亦財部と同族に屬し、矢田に住んで居たから小氏をかくいうたのであらう。

タカラブネ　寶船　七福神の乘つた寶船の圖に、『ながきよのとをのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな』といへる廻文を題した半紙の摺物である。藩政時代に元日の日暮に賣りに來た。それを枕下に敷いて寢れば、吉夢を得ると信ぜられた。

タカラベツグマロ　財部繼麻呂　仁明天皇の承和四年十一月十七日、加賀能美郡の人財部繼麻呂孝行を以て賞せられた。繼麻呂は父母の存した日、定省の禮その節を失はず、歿後に於いても操行尚變ぜず、朝夕哀慕したから、隣里皆推服せぬはなかつた。是を以て勅して三階に叙し、終身その戸の租を免じ、門閭に旌表して衆庶を勸奬し給うた。

タカラマチエンショウ　財町圓正　→ヤマモトエンショウ　山本圓正。

タガリヨウイン　多賀了因　初め能美郡小松の醫であつたが、享保十五年新知二百石を受けて藩醫となり、寶曆十三年歿した。その子意安、二十人扶持を給せられたが、明和二年不行狀によつて改易せられた。

タカレイマイダイギン　高禮米代銀　→キリダカ　切高。

タカキ　高井　鹿島郡國分の内の小字。

タカキ　高井　珠洲郡春日野の内の小字。

タカキサンキ　高井三喜　初め前田利常の掃除坊主であり、河北郡山上春日社（今の小坂神社）再建の際、筋目あるを以て寛永十三年九月その神主たることを命ぜられたもので、後には吉田家から免許を得て高井大和と稱した。

タカキニヒヤク　高井二百　名は濟永。河北郡山上春日社（今の小坂神社）の祠人であつた。好んで墨竹を畫き、二百館・巽齋・望湖樓等と號した。安政二年十月七十二歳で歿。

タカヲ　高尾　江沼郡北濱に屬する部落。茇憩紀聞に、この村の所々に穴があるが、村の東金藝谷にあるものが最も深いと記してゐる。

タカヲ　高尾　石川郡富樫庄に屬する部落。

タカヲ　高尾　河北郡月津の内の小字。

タカヲウヂ　高尾氏　官地論長享二年六月七日高尾城で討死した者の中に、高尾若狹の名が見える。又長氏家臣堀内家譜に、その祖大炊景光が天文末年加賀に來り、高生の城主高生藤次郎から扶持を受けたとある。高生も亦高尾に同じい。

タカヲカサマ　高岳樣　前田利長が慶長十四年九月越中射水郡高岡に移つてから後、金澤の上下から高岳樣を以て呼ばれたと見える。同十六年五月廿七日横山長知・奥村榮明・篠原一孝が、神社佛閣に利長の快癒を祈つた文書の如きは、皆『高岳樣就御不例云々』と記してある。

タカヲカジヨウ　高岡城　越中射水郡に在る。この地千保川近く城下を繞り、下流小矢部川に注ぎ、舟楫遂に海に通ずる。慶長十四年三月富山城罹災の後、前田利長關野の地を選定してこゝに城を築き、改めて高岡と稱した。その移徙は、從來之を八月十六日に係けるもの多いが、利長の親書に據つて九月十三日とするのが正しい。こゝに至り富山・守山・木舟の士庶來り集り、忽ち一市邑を成した。利長こゝに居ること六年。十九年五月二十日城内に薨じた。この年十月、前田利常兵を大坂に出し、領内各城地に裨將を置いて留守させたが、高岡が何人によつて守備せられたかは詳かでない。但し翌元和元年の役には岡島備中一吉を置き、凱旋の後利常命じて城の櫓櫓殿閣を撤せしめた。而もその牆壁壍濠を存することはすべて舊の如くであつた。城跡の東南二百七十九間、南西二百一間、西北二百